



## 「進化するトヨタの日本的経営」語る 一流経済人招いて「経営革新」講座

現役の経済人を講師に招いて行う、中央大学南甲倶楽部寄附講座「経営革新」が9月30日から後楽園キャンパスで始まった。この講

座は、昨年度は一部を除き総合政策研究科に在籍する院生のみを対象としていたが、今年度は開かれた研究・教育方法をめざす産学コラ

ボレーションの観点から、広く学部学生や一般の聴講もオープンにし、同時に法学・経済学・商学研究科でも正規開講科目になった。

初回の講義は「トヨタの経営改革『メガコンペティションと日本の経営の進化』」と題して、講師にトヨタ自動車副社長の荒木隆司氏Ⅱ写真Ⅱを招いて開催された。会場となった後楽園キャンパス3号館14階の大教室には、私服姿の学生から、スーツ姿の会社員まで多くの受講者が集まり、座席が不足するほどの盛況。

みな真剣な表情で、「世界のトヨタ」の経営哲学に聞き入った。

「日本の経営が間違っていたわけではない」と荒木氏は語る。キャノンもそうだが、トヨタの理念である。トヨタは円高不況を克服して、04年度3月期の連結最終利益は1兆1620億円と日本企業で初の1兆円超え。そこには、従来の「日本の経営」の進化が重要な点として挙げられる。近年それが軽んじられる風潮にあるが、この機会に日本の経営のノウハウを進化させていけば、グローバル時代における競争力は追加される。伝統的な強みと新たに追加される強みの複合的結合がよい結果を生む、と述べた。

「世界の4分の3の人はまだ車を運転していない」という発言もあった。トヨタの2010年グローバルビジョンにはいくつかのキーワードがあるが、今後は地球規模でのモーターリゼーションが起ると予測する。ブラジル・インドなどの国ではまだまだ新たな需要が生まれてくる、としている。他にも少子高齢化・成熟社会の進展など。それらの変化に対応していくことで、新たなビジョンが描ける、という。

同時に「地球規模での最適生産」が大事だ、とも荒木氏は指摘した。マルチ・ナシヨナルから真のグローバルへ向けて、世界の生産工場を拠点化していくことで、国際的な分業体制を一層築いていく。トヨタは地球規模での最適生産へ向けて動きだしていると、先端をいくスケールの大きな話がつづいた。

南甲倶楽部は、主に経済

界で活躍する学員で構成されている親睦団体で、2002年には設立50周年を迎えた、この種の団体としては私学でも屈指の団体だ。その設立目的の一つとして、母校の発展に寄与することとしており、寄附講座は昨年度から始まった。今

年度の講座は、有富慶二・ヤマト運輸会長や佐治信忠・サントリー会長、後藤卓也・花王会長ら文字通り日本の経済界をリードする多彩な講師陣をそろえ、来年1月27日に行われる鈴木敏文・イトーヨーカドー会長（南甲倶楽部会長）

の最終講義までつづく。講義日程は中央大学公式ホームページ「イベント情報」に掲載されている（[http://www2.tamacc.chuo-u.ac.jp/daigaku/dep\\_pol/keikakushin.htm](http://www2.tamacc.chuo-u.ac.jp/daigaku/dep_pol/keikakushin.htm)）。

【学生記者 滝沢孝祐】

## ほんのり本上まなみさん来校 ネットワーク多摩&NHK共催イベントで

ほんのり清楚な風が、多摩キャンパス8302教室を吹き抜ける。女優の登場に、ギヤードもキヤードでもない、「うわぁ」とウツトリしたようなため息がもれた。「本上まなみのトップランナー・イン多摩」。10月29日に行われたイベントに、本上まなみさん「写真」が顔をみせた。

NHKと「学術・文化・

産業ネットワーク多摩」の共催企画で、第1部は「ネットワーク多摩」の活動報告会。多摩地域の50大学、14行政、40企業・機関が加盟する「ネットワーク多摩」は、多摩地域の活性化や多摩の魅力作りに取り組んでいる。活動報告会では、学生中心で運営している学生教育ボランティアやフットサル大会・TAMACUP、立

川市での環境教育プロジェクトなどの活動をパワーポイントをつかって報告した。教室が学生らであふれかえってきた。第2部の開始である。本上さんが登場——。テレビで見るより身長が高く、小顔。さわやかなほほえみ。NHK「トップランナー」のレギュラー司会者が、NHK番組制作局少年・こども番組チーフ



ロデューサーの亀谷誠一氏と語る趣向だ。

司会者になつての本上さんの感想や、放映された映像をみながら「トップランナー」の紹介を中心にトークがつづいた。「トップランナー」は、映画、音楽、文学、アート、スポーツなど、各ジャンルの第一線で活躍

する「トップランナー」を毎週1人（組）スタジオに招き、その魅力や人気の裏側にある秘密や本音、エピソードなどをめぐるカルチャー・トーク番組。

「目標に向かつてまっすぐ進める人、にたくさん出会って、いつも感動しています。自分も自信を持っていえるものを見つけた」と、司会者はあくまでも静かで謙虚だった。「本上さんはおきれいな方ですが、番組収録後にゲストの方からアプローチされないんですか？」

質疑応答では、こんな思



中曽根康弘・元首相の講演会（政治学会主催）が10月26日、多摩キャンパス・クレセントホールで行われた。中曽根氏の写真は新潟の地震罹災者へのお見

舞いを述べてから、「戦後の日本社会と現代問題」のテーマで、戦後の流れから小泉首相論まで幅広く語った。ことしは日米通商条約から150年、日露戦争から100年、大東亜戦争から来年で60年を

むかえる歴史的にめざらしい年。ここで一度私たちは歴史を見直さなくてはなら

い切った質問も。

「武田真治君と一緒にラ

イブに行かせてもらったたり、メール交換をしたりするこ

ともありますよ」と、人気が優は笑って答えた。このあと12月10日には、多摩キャンパスで「トップ

ランナー」の公開番組収録が行われる。（学生記者 西原香保里）

## 「日本の背骨正せ！」 中曽根元首相が講演

中曽根康弘・元首相の講演

会（政治学会主催）が10

月26日、多摩キャンパス・

クレセントホールで行われ

た。中曽根氏の写真は新

潟の地震罹災者へのお見

舞いを述べてから、「戦後

の日本社会と現代問題」の

テーマで、戦後の流れから

小泉首相論まで幅広く語っ

た。

ことしは日米通商条約か

ないとし、戦後政治の枠を

作った吉田茂首相について

「マッカーサーとうまく戦

後の日本を処理したが、し

かし一番大事な国家の将来

のことを考えたり、基本の

姿を言っていないかったこと

が欠点であった」と戦後日

本の反省を語った。また戦

後を3つの時代に分けて時

代認識を披露。始まりの「冷

戦時代」は戦後政治の総決

算といわれ、この時期はた

くさんの改革が行われた。

次は「錯乱時代」。政治は

連立内閣時代となり、政治

の不安定が10年も続き、経

済は不況となり、社会的に

は凶悪事件がおこり、90年

代の日本は漂流していた。

そして、現在を「9・11

（01年）時代」と形容する。

「小泉首相は運がいい、

ツキがある。ツキも政治の

ひとつだ。そして気力があ

る」と小泉首相論。内閣が

疲れてきたなあと思つたら、

イラク戦争や朝鮮問題。9・

11テロがおきたときは小泉

首相に任せるしかないとい

う風な感じになり、3年間

も小泉内閣は続いている。

「これは10年続いた漂流時

代をくいとめた。そしてYES、NOをはっきり言う

姿に気力を感じる。しかし、

世論調査を大事にしている

道路問題や郵政の民営化な

どを優先して行っているが、

一番大事な21世紀の日本の

基本理念、国家像がみえて

こないことが欠点だ」と注

文をつけた。

また憲法問題については、

「今の憲法はマッカーサー

から与えられたものであり、

自分たちで作らなくてはな

らない。戦争をし屈辱にた

え戦後を過ごしてきた日本

人のあらたな第一歩」と強

調した。

教育論では学生からの質

問に答える形で、「背骨か

ら直さなくてはならない」

と強く語った。小学校では

ウソをつかないなど基本的

な日本の規律を教える。中

学校ではその生徒と国家、

社会、世界との関係を教え、

高校では志をあたえ、大学

では使命感をうえつけるべ

きである。今は技術論が多

すぎて、基本事項を教えて

いない。「普通の国家が行

うように歴史、文化、愛

国心など教えることが大事

だ」と持論を展開した。

【学生記者 町田梨絵】経

済学部2年】